



次 目

宗教撰擇の基準	本	多	日	生
立正大師の功勳	本	多	日	生
日什大正師略傳	竹	内	日	照
聖訓摘要	本	多	日	生
知法思國會第二回懇談會	本	多	日	生
教報	本	多	日	生



四月發行 本多日生著

信仰修養、思想より論じたる

# 日蓮主義の本領

定價金貳圓五拾錢  
五二八頁  
【送料十二錢】

## 目次 (總の部)

- 一、信仰と修養と思想
- 一、信仰修養思想と立正大師
- 一、教育勅語の解釋と應用
- 一、思想の基準

## (信仰の部)

- 一、眞の佛と眞の我
- 一、信心と正憶念
- 一、菩薩行

右は中央出版社の發行なるも統一發行所へ申込まるれば二割定價より割引する事となれり希望者は統一發行所へ申込まるべし

## (修養の部)

- 一、新時代の婦人の修養
- 一、佛教の六善事
- 一、日蓮聖人の人格

## (思想の部)

- 一、國と入と教
- 一、東洋思想の大共通點

以上

# 宗教撰擇の基準

## 三、道徳上の考察

次に宗教を選ぶには道徳の側から見て考察しなければならぬことがある、この道徳上の考察に合格しないやうなものは今日及び將來の宗教として受入れてはならないのである。如何に宗教の必要が迫つて來ても、道徳上に有害なるものは斷乎として之を排斥しなかつたならば宗教と道徳が矛盾するが爲に一國を危うしたことは、歴史の上に明瞭なことである。明治維新の際に排佛論の起つたのも、佛教が道徳を蹂躪するといふ彼等の觀察から出て排佛論にまで及んだのであるから、是は佛教徒と雖も大に反省をし

本多日生

なければならぬことである。排佛思想の爲に現代の弊害に陥つて、今更頭を下げて佛教を復活せんとするに至つたその機運に乗じて、己の持つて居る弊害をその儘大きな顔をして乗出すといふことは、餘りに圖々しいといふか、眞に教を思はず國を思はない遣方であると言はなければならぬ。所が動もすれば宗教には其の弊害が伴つて來るので、その点が教の軌範を以て任する所の日蓮主義の本領として、斯の如き過ちを國家に取らせないやうに努めなければならぬと思ふのである。

先づ道徳上の主義に就て論ずれば限ないことであるが、併しそれも一つの問題として考へなければ



ならない。道德の主義が如何なるものかといふことに就ては、日本ではまだはつきり決つて居らぬのであるから、主義としての區分を認め難い点もあるが或は義務の道德であるとか、或は報恩の道德であるとか、或は個人主義といひ、社會主義といひ、國家主義といひ、色々の名前を付けて道德の主義の區分は漠然として居る、是は實に危いことである。この主義といふことも徹底しなければならぬが、大体教育界などからは宗教に對して註文すべき規準を失つて居る、それが眞に恐るべきことである。「斯ういふ主義の道德を迎へなければならぬ」といふ道德の根本主義といふものを言表はし得ないやうになつて居る或は自由主義といつたり、政治家なども此頃は新自由主義などと稱して、變な名前を付けて氣の利いたやうな顔をして居る、實に今日は道德上の主義に於て國民を誤つて居るのである。

吾々の立場から言へば、日本の宗教を還ぶ上に於てこの思想は東洋道德の主義として考へたならば、家に於ては父母の恩、社會に於ては相互の恩、國家に於ては國王の恩、天地に於ては三寶の恩といふが如き、報恩主義の道德といふものを十分に徹底せしめなければならぬ。さうすれば儒教の仁義の道德もその中に入り、我が皇祖皇宗の遺訓等で現はれて居る大和民族の道德精神、君に忠に親に孝といふことも皆報恩の精神である。故に我國の傳統的の美風も、報恩觀念といふもので包んだならば残らず之を包容することが出来る。日本人は昔から恩といふことを盛に言ふて居る、祖先から御恩を受けて居る、君恩であるとか、或は自分の祖父さんから御世話になつた主人の恩であるとかいふやうに皆恩の考がある、忠臣蔵の四十七士の觀念といふものは、矢張主恩を考へてそれに報ひんとしたものである。或は淨瑠璃となり、芝居となつて民風を養つて來た事蹟、それ等の全部を貫いて居るものは皆恩義の觀念であ

ては先づ東洋道德が根柢を成すものである。東洋道德に共通して居る主義といつたならば、佛教が教へたる報恩主義の道德である、是が儒教の仁義の道德にも、惟神の教の道德にも通じて、その根柢を成しているものである。唯だ儒教や惟神の教に於てははつきりした主義が言現はせないのである、儒教の道德が何主義であるかといふことははつきりしない、唯だ天道明德、仁義忠孝といふやうな言葉で言現はされるけれども、學術上の道德主義としては何であるか「義」といふことは義務かといへば、義務でもない、「仁」といふことは慈悲かといふとさうでもない、そこが甚だ透明を缺いて居る、佛教の道德は主義としては報恩主義である。報恩主義の上から第二に自分より以下の者に對する時、慈悲主義になるけれども、この報恩主義と慈悲主義は表裏を成して居るものであつて、表面に言現はす時之を報恩主義と謂ふべきである。

左様に先づ道德の主義としては報恩主義といふことを、教育者などがもつと能く理解して、さうして宗教を判斷するやうにならなければならぬ、どうしても道德上の考察としては第一にそこに進むべきである。義務とか權利とか、自由とか博愛といふやうなことは部分的に言現はされる言葉であつて、綜括されて居るものではない。人間一人の存在は先づ家庭に於て父母の恩、社會に於て相互の恩、國家に於て國王の恩、天地に於て三寶の恩といふこの四つの範疇を以て考へない限には、完全なる説明は出来ない。

さうしてその出發点が親に對する孝順の觀念に在るといふ思想と、宇宙的感情に基くといふ思想と兩方がある、儒教でも「孝は百行の本」といひ又「一誠以て之を貫く」といふ、一誠の方は天道に對して起ることであり、百行の本は親に對して起る孝順の



心であるが「孝」が本か、「誠」が本かといったならばそれは、どうしても「誠」の方が根本であると謂はなければならぬ。さうすると宗教的徳徳即ち宇宙的感情の方が人格の基本になる、是が本當のことである。佛教に於ても矢張信は道の元、徳の母なりといつて、信を以て第一義と説明せられた、であるから佛教は親孝行よりも先に信仰といふものを説くのである。「誠心は水を清す珠の如く、孝順は城を築く礎の如し」といつて、第一に信を置き第二に孝を置いた所を見ると矢張佛教の思想の方がその点に於て優れて居ることを認めるのである。佛教が徳徳を無視するなるといふのは、少しも佛教のことを知らずに言ふて居るので、本當に研究したならば實に感心するより外ないやうに整うて居るものである。それから第二には國民道徳といふことに依つて宗教を選ばなければならぬ、是はさうしても國家の歴史的發展の上に道徳が涵養されて來るのであるか

ごは餘計なものだ」……それはさうかも知れぬけれども、長い間さういふ民風を成して來て居る以上は、矢張正月には「御目出度う」と言はなければならぬ。左様にその國の風俗習慣から發達して來たことはそれに従つて行かなければならぬことがあるのである。その主なるものは國民道徳の所謂忠君愛國父母孝養といふやうな特殊の道徳が發達して居る、之に害のあるやうな宗教は我國に於ては容れることは出來ない、國体を尊崇し家族制度を盛立て、行くものでなければ、日本の宗教として迎へることは出來ないのである。是は明治以來文部省が教育の方針として注意せられて、それが爲に教育の上から宗教を却けた譯であるが、今や宗教を取入れやうとするに就ては、矢張その点に就て警戒を要することは當然である。唯だ總ての宗教がそれに合はぬと思ふのは文教の局に當る者の頭腦が小さかつたのである、國体の尊嚴を擁護し、國家の發達に貢獻し、家

ら、日本は日本の國體に基き、日本の歴史に基いて日本的國民道徳が發達して來たのである。故に我國に於ては「克ク忠ニ克ク孝ニ」といふことに現はれて來て、其の外日本の歴史を通じた國民感情といふものがそこに動いて、所謂國民道徳といふものが成立つて居る、さうして日常の小さな事に至るまでその國の風俗習慣といふものが起つて來るのである。その一々は今茲に述べないでも「此事は斯する方があたりまへである」といふ事が世の中には澤山ある、さういふことは成べく穩かに、宗教の傳統に於て大いに害のない事柄は守つて行く方が宜いのである。例へば年中行事として行はれて居る所の正月に「御目出度うございます」と言ふやうなこともそんな事は言はぬ國もある、「何も歴が改つて目出度いなどと言ふ必要はないぢやないか」といふ理窟を言ふて居る人もある、理窟を言へば言へぬこともない、「改つてそんなことを言はぬでも宜い」「年賀狀な

族制度を盛立て、行くやうな精神は、正しき宗教の中にはちやんとあつて然るべきものである。是等の道徳上の考察よりしたる基準に就て、佛教殊に法華經がどういふ關係を取るかといへば、前に言ふ通り主義としては報恩主義といふものを佛教は模範的に示して居る、之に反對すべき理由は教育の上にも於ても無いのである。寧ろ教育者が、唯だ忠孝のみをいふて社會道徳をいはないとが、宇宙道徳をいはないといふことは、教育者の頭腦が狭いと謂はなければならぬ。人格を作るのに「仰いで天に恥ぢず俯して地に恥ぢず」とか「天地正大の氣粹然として神州に鍾まる」とか「浩然の氣曰く、至大至剛」とかいふ偉大なる宇宙感情を本にせずしては人格を造ることが出來ぬといふことは、聖賢の學に於ても教へた所である、唯だ小理窟みたいなことを幾ら教へた所が、宇宙情操に基かない所に何の道徳が發現するか。佛教に於ては即ち信心を本にしたる報恩感



謝の生活を教へた所に於て眞に理想的模範的なるものである。今後の教育界には「さういふ良いものがあつたか」と言つて、喜んで之を迎られ、ば宜いのである。それを忠孝とはいふけれども、四恩といふことは言悪いやうな気がして居る所に偏狭なる教育者の執着我見といふものが在るのである。

それから國民道德の方に這入つて國體の眞相はどうかといふと、是は佛教の轉輪聖王の理想が自然に國體に一致して居る。或る見方に依れば、日本の國體を彌が上にも立派に造成したものが轉輪聖王の理想であつたかも知れぬ。それは學問上に於ては何方から議論の餘地があるが、一方にさういふ事實があつて見た所が、それを盛立て、その意味合ひを飾立て、行く理想がなかつたならば矢張立派に發達しないのであるから、幸に佛教が早くから渡來して、殊に聖德太子に依つて日本の文物制度が完備して來た。それより前のことは所謂口傳であつたから

い程の立派な國體擁護者である。それは何も物好きにやつたのではない、佛教の思想が元來さうなのである。弓削道鏡が出て國體を破壊せんとしたといつて、道鏡が一人で佛教を代表するやうに思つて居るのは、さういふ觀方をする儒者の偏見である。日蓮聖人の如きが眞に佛教の理想を代表して國體を擁護せられたのである。坊主の中にも道損いの坊主と本當の坊主がある、道損つた道鏡を以て佛教の全体であると思つて居るのは餘程の偏見である。そんな間違つた事をする者は、頭は坊主でも佛陀の教に背いた者である、佛陀の教どころではない人間の道に背いたものである。それは坊主には限らない、そんな者は世の中に澤山ある譯である、何時の世でも警戒しなければさういふ者が出て來る。だから道鏡を以て佛教を罵る必要はない、日蓮聖人の國體擁護の働きが佛教の精神から導かれたものである、房州小湊に生れた漁民の子、無名の一沙門があつたのを續けて、

どうであつたか本當には分らないけれども、それを成文にして日本の歴史が分るやうになつた時に聖德太子が出られて、さうして轉輪聖王の理想からそれに合するやうに日本の國體といふものは説明されて居るのである。だから佛典は輪王即ち帝王の學を教ふるものである。と聖德太子の憲法發布の序文に言はれて居る、佛教を我國に採用する所以は帝王學として日本の帝王を轉輪聖王たらしむる模範指導であるが故に佛教を採用するのであると言はれて居る、眞にそれは立派な觀方である。であるから國體の尊嚴を擁護するどころではない、更に進んで言へばそれを闡明し、國體に若し明にならぬ所があれば佛教の理想を附け加へて一層それを莊嚴にすることが出來たものであると思ふ。又將來も之に努力するのが必然のことである、日蓮聖人の如きは鎌倉時代に於て我が國體が傷付けられんとする時に、身を挺して、之を擁護せられた、實に我國の前後にその比を見な

あの理想を發揮したる所以は、佛陀の聖教に導かれしが故であるといふことを考へたならば、それが佛教の代表者である、斯う考へなければならぬ。それから國家觀念に就ても勿論佛教に於ては十分教へられて居ることで、阿含の中に「國家不衰の七法」といふものを説かれて、國民は國を大切にしておいて國家の繁榮の中に國民の幸福を保全し、進んでは國を通じて世界に貢獻しなければならぬ、佛教の理想は他國を侵略するのではない、國が理想的に發達して、その國の單位に依つて善き國が所謂聯盟を作ることが如き有様になつて、そこに倫理的に結合して行くことが理想されて居る。國家は互に侵略して利益を恣にするものではない、國が立派に構成されて、その國と國とが相交はつて行く間に人類の文明を大成するといふことになつて居る、佛教の中にその通り通る處に説かれて居るのである。だから國家を輕んじてはいかぬ、自分の國を大ならしむるが爲に他



の國を破壊してはいかぬ、國家が立派に完成して、完成した國家が結合して行く、その中に指導的地位に立つ者は道を以て指導するのである、それが轉輪聖王である。であるから轉輪聖王は他の國家を侵略するものでなく、他の國家を道徳的に啓發指導するものである、それが日本の理想であり、皇祖皇宗の遺訓に「天業を恢弘し天下を光宅する」といふことがそれである。

さういふ意味の國家を盛立て、行く爲に、佛教の思想といふものは實に立派である。大きな池に色々の魚が住んで居つても、それは堤防と龍の力に俟つのである、龍去る時水は涸れる、堤防の壊れる時水は無くなる、堤防を堅固にし龍が威徳を旺にして居なければ、魚の安全は保障されない。堤防とは國家の範圍領域である。龍とは即ち國王である、そこで國家皇室に對する忠君愛國の道徳といふものを龍と堤防とに譬へて、釋尊は守護國界主經の中に説かれ

れば宜いといふことならば道徳も何も要らぬ、人殺しをするのも人を助けるのも同じものだといつて居れば宜い譯である。苟も宗教を探る以上は宗教の善惡といふことを認めて善き宗教を探らなければならぬ、宗教が一旦人心に染入つたならば中々抜けないものである。明治以來六十年かゝつて、日本が下らない宗教を人心から奪つたといふことも、考へ方に依つては良い事をしたのであるから、是から本當の宗教を與へる時分には、また下らないものを入れてはならぬ、今度は本當のものを入れなければいかぬ、それが爲には吾々は身を賭して正しき宗教に基く思想的運動をやつて、宗教の復活と同時に本當の宗教に來れといふ、上下を震撼する様な運動をやつてこそ、日蓮聖人の思石に報ゆる所以であると考へる。次にこの國の善良な風俗習慣といふことに就ては宗教の最も慎しまなければならぬことである。下らない事までも宗教の名に依つてその國の風習を崩す

て居るのである。斯ういふ思想は儒教にもはつきりして居ない、他の書物にもはつきり無い、佛教のみこの龍池の譬を擧げて國王の徳を龍にたとへ、國家の必要を堤防に譬へて、池に住む鰐や鯉はこの龍と堤防とに依つて安全を保障されるといふことが説いてある。さういふ立派な國家觀念を通じて、さうして、日蓮聖人の如き偉人が出て鎌倉時代に國家思想を高調せられた、それが佛教である。斯ういふ立派な宗教が在るのであるから、日本の國体なり國家なりに適應しないやうな宗教を、何も氣の廣いやうな顔をして御座なりの教育者が迎入れる必要はない。はつきりと國体に一致し、國家觀念を高調せしめ、日本の善良なる風俗習慣に一致するものでなければならぬといふことは、宗教の必要を認めると同時に力強く教育界にその思想を漲らせなければならぬのである。それが國家を思ふ所以であり、又教を受する所以である、唯だ氣の大きいやうな顔さへす

といふことは一種の罪惡である。宗教はその事を能く教へられて、隨方里尼の戒といふことを説くのである。「隨方」はその地方に隨ふといふことで、その國の風俗習慣を尊重する、「里尼」は所謂戒である、その國その地方の善良なる歴史的風俗習慣に従つてそれを大切にして行かなければならない。であるから日本に來ては敬神の觀念は大事である、皇室の尊嚴は大事であるといふ風にして、宗教は日本の歴史的發達の風習を一つも壊したものは無い、良きものを皆保存して益々之を發達せしめて來たものが宗教である。敬神の觀念などは宗教を通して始めて盛になつたものである、佛教の普及せざる以前は、神社といふものもこんなに澤山はなかつた、國民の敬神の觀念もぼんやりして居つた、神官が之を擧げたなどと思つて居るのは、人の功を横取りする者である、僧侶の手に依つて敬神の觀念は普及した。其他國民の色々な美風といふものも大体は宗教に依つて造ら



れたものである、それを出来た時分にこつそりと横取して大きな顔をして居るのは面白くないといふことを、心ある學者は言つて居る、吉田東伍といふ偉い學者があつて、歴史家であるが、宗教が骨を折つてすつかり仕上げたものを横取りして大きな顔をして居る神宮者流の面が憎いといふことを彼は言つて居る。日本の上下に善良なる風俗習慣を造つた大部分の力は宗教である、殊に東北地方などは誰が一体文化を開いたのであるか、神宮などは誰も行きはしない、皆僧侶が行つて文化を開いて始めて人間らしい生活が出来るやうになつたのである。

左様な譯であるから道德上の考察としては、主義に於ても國民道德に於ても善良なる風俗習慣に於ても十分の注意を拂つて、長い歴史を経て日本に順應一致して居る佛教のやうな宗教を採らなければならぬ。既に聖徳太子以來千四百年の歳月を経過して居る、此の間に有ゆる方面に於て調和して來つた佛教

#### 四、宗教上の考察

次に宗教そのもの、上から考察するならば、先づ宗教學に於ても決定して居るが如くに、絶対の人格者を信する宗教でなければならぬ、中途半端のもの、信仰の對象にして、大きな山を拜むとか、狐や狸を信するとか、左様な天然崇拜や、動物崇拜や、庶物崇拜や、英雄崇拜といふやうに宗教學の上で野蠻人の宗教と相場の決つてしまつたやうなものを今更持出す法はない。二十世紀の今日、日本の文部省あたりが反省して復活する宗教の中に、蠻民蠻族の遺

は、實に國民的宗教として尊重すべきものである。今俄に異れる歴史の國から來たものとは大に違ふ。何處の國に、千四百年も十分自國の民族と共に發達して來た宗教を侮蔑して、横合ひから來たそれよりも低い、淺い、一致しないものを迎へる愚者があるか、恐らくは日本だけであらう。西洋人は佛教が優れて居るといふことを知つて居つても、中々取入れないではないか。それを容れるのが偉いのだといふやうなことを、最近の宗教家大會などでも言つて居るけれども偉いのか間が抜けて居るのか分らぬ、自分の方に立派なものがあるのにそんなものを入れてそれで小言を言はない所が偉いといふ……偉いといへば偉いか知らぬが、間抜けといへば間抜けである。立派な宗教が日本にあるのだから、それに歸るのが當然である。クリスチャンなどが氣の利いたやうなことを言ふけれども、どうも我輩には受取れない、段々彼等とさういふ議論をしたこともあり、又

風と相場の決つたものを許すなどといふのは餘りに馬鹿げた事である。さうして段々宗教のことを考へて見ると、多神教にはどうしても許すべからざる弊害が起るのである。宗教は唯一絶対のものに向はなければならぬ、頭が幾つもあるといふやうなことは宗教として不完全なものである。何でも一に歸さなければならぬ、國家に於ては忠臣二君に仕へずといひ、家庭に於ては貞女兩夫に見えずといふやうな純潔なる道德を立てる上に於ても必要なことである。であるから宗教の信仰の歸着する所は唯一絶対でなければならぬといふことも、宗教學の教へる所である。世界に基督教が勢力を得て居るのも、彼が唯一絶対といつた言葉に在る、此の事は文明の程度を即定する標準になつて居る、澤山の神佛を雜然と日本の神棚のやうに並べたやうなことをして居つては駄目である。その唯一絶対の人格者といふことには、教育者な



どが能く理解して居なければならぬ。日本が八百萬神だからといって、中心のないやうな個々の雜然たるものは宗教として決して貴いものではない。國体論者や國粹論者はそこに非常に不明な点がある。日本でやつて居たことは何でも良いやうに思つて居る、昔は人倫の上に於ても、伯母さんと夫婦になつたりするやうなこともあつて、歴史の上では色々な事があるが、これを是認して、國學者は「夫婦別ありナンといふことは支那人の言ふことだ、日本ではそんなことは構ふものか」と言つたり、随分取扱いやうなことでも歴史にあるものを誇の如くに言ふて居る。例へば日本人に學問がなかつた「學問などはない方が宜い、學問が出来てから人間が小理屈を言ふのだ」といつて、無智を誇るやうなことを言つたり、文字といふものが日本になかつた時代を寧ろ善しとして、「字などは無い方が宜い、そんなものがあるから面倒になる」と言つたり、色々調子外れの

ことがある。宗教上のことでも、日本には八百萬の神様が澤山あるといふことを以て誇として居つたならば、手前味噌では通るか知らぬが、世界へ持出したならば「何時までも馬鹿なことを言ふて居る、野蠻の標本だ」といふことになる。英國の公使であつて日本に長く居つたパスカルといつて人が、日本人は中々文明開化になつたけれども宗教の上では如何にも淺ましい國民であると言つた、それは何處か歩いて居る時に狐が出て来た、それを見るとパスカルが狐に向つて掌を合せる形をして見せて「日本人は是だ〜」……それから今度はピストルを出した、「自分の國では是だ」といつて撃つ眞似をした、英國では狐を見たら撃つてしまふ、日本では狐を見たら拜むと言つた、斯ういふ話があるが、それは何を物語つて居るか、日本人は狐の尻を拜むやうな野蠻である、日本は文明開化といふけれどもその点は駄目だといふ痛痒を喰はして居るのである。其事はもう

四十年前の話であるのに、今頃やはり東京の真中で、穴守稻荷だとか何の稻荷だとかいつてやつて居る稻荷といへば神様のやうであるけれども、事實は狐を拜んで居る、實に情ないことである。どうしても宗教上の考察としては、宗教家は勿論教育家も有ゆる識者階級の者が皆一致して、宗教を復活するに付ては絶對人格者でなければならぬ、この宇宙を貫いて始なく終なく絶對の一番貴いものでなければならぬ、人間よりも低いやうなものを拜むといふことはない、人間の及ばぬ所の神や佛があるのである、斯ういふ意味合ひを十分に理解しなければならぬ。

者が行く、毒消の御祖師様といへば毒に中てられな………僅かづつの事を以て信仰の相手にして居るは非常に悪い考である。人間の親でも親切は行渡つて居るものである、子供が毒に中てられても、厄年になつても、泥棒に出會つても、如何なる場合でも親は心配をするのである。それを神佛ともあるものが「毒に中てられた者だけ此方に来い、泥棒に會つた時には彼方に行け」………そんな人間の親切にも及ばぬやうな小切つたものを以て神佛とは言へない、無限の慈悲を説いて始めて宗教といふものがあるのである。それが即ち超人的といふ言葉である、人間を超越した偉い者といふ意味で神佛といふ言葉を使ふので、人間よりも下のものにそんな言葉を附けることは許されないことである。そんな事をやる者は常識に缺けた者であるといふことは、今日世界の人文の宗教學的知識に於て相場が決つて居ることである。

さうしてまたその絶對者は、僅かばかりのことを護るといふのではいけないので、例へば不動さんは火事を守るとか、帝釋様は何を守るか知らぬが、穴守稻荷は穴だけ守るといふやうなことであらう、實に詰らぬ事である。厄除の御祖師様といへば厄年の

………



もう一つ宗教上の考察として心得べきことは、どうしても宗教は平和性といふか、調和性といふものがなければならぬ。宗教は人心を和げるものである。有ゆる利権の衝突や世の中の混雑を諧和して、それを和らげて行く作用がなければならぬ。一人に付て言へば荒らいた精神を警めて気分の良い優しい人にするのである。それが宗教である。宗教を信ずるからといつて癩癩を起したり、或は又名を宗教に藉りて或る種の誓を立て、破壊に進んで行く、さういふ宗教もある。猶太教などはそれである、彼は破壊する事を以て目的として居る、だから彼等は結婚をしても、新郎新婦が盃を酌交して之を決して飲まない、コップを床の上に投付けてしまふ、さうして我等の本國を恢復したならば改めてエルサレムの聖殿で結婚式を挙げるのだ、それまでは假の結婚である。我等の敵をこの盃の如くに打破らなければならぬといつて、盃を打割つてしまふ。又彼等の説教をする

のでも、感動したならば、佛教でいへば有難いといふので掌を合せて南無妙法蓮華經といふべき時に、彼等はざり／＼と切齒をする、男は必ず切齒する、それが中々上手に訓練されて居るから、えらい音を立て、ざり／＼とやる、女の方は悲鳴を挙げるヒ／＼とツといつて悲痛なる泣聲を出す、喋べる者は演壇で「この我等の怨を晴さで置くべきか」………まるで敵討みたいなきことに考へて居る。さういふものは宗教ではない、呪ひである。そこまで行かないでもそれに似たやうなものは幾らもある、聖天様の信仰などは幾分か呪ひを意味して居る。人の果報をこつちへ寄せせといふので、寄せさせなければ油でグラー／＼煮てしまふ、油の中に聖天様の木像を投込んで「さア言ふことを聴くか、言ふ事を聴けば救ひ上げてやる、さもない限りは許さぬ」と言つてやつて居る、親の福でも孫子の福でも、七代の福を自分の方へ寄せせといふ、實に慾張つた信仰である。さう

いふことは非常に悪い性質を帯びて居る、岡山縣に行くと骨皮道痛といのがあつて蛇が祀つてある、それに願を掛けると怨のある人間を骨と皮とにしてしまふといふので、中々流行つて居る、世の中に人を怨んで居る者も多いものだといふことが分る、人を骨と皮とにしてやらうといふ連中が續々押掛ける。人間といふものは恐いものである、之を東京邊りへ持つて来てやつたならば随分繁昌するであらう、世の中には呪ひといふものゝ多いことが分る。宗教はその呪ひを和げて平和の精神に歸すべく働くものでなければならぬ。

て居れ、その分にはして置かぬ」と言つて神に誓ふやうなことをやつて居る。そんなものは總て宗教ではない、如何なる場合に於ても人に平和な心、満足な心を與へるものでなければならぬ。この原則に反したる時、昨日まで良き宗教であつても、人間の心にさういふ怨や呪を懐かせたならば、一擧にしてその宗教は宗教ではない、所謂魔道邪説に陥つたものであると言ふことが出来る。

それが今日は利権の争の爲に、労働問題とか社會問題といふものゝ中に宗教家が這入つて、その提燈持をして彼等をけしかけて喧嘩をさせる、非常に悪い事である。或は又政治運動の中にも這入つて、朝鮮の天道教などは日本を怨むやうなことを言ふのである、朝、顔を洗つたならば「おのれッ日本人覺え

居るのである。その事は今更詳しく言ふ必要はないのことは勿論法華經壽量品に於て最もよく説かれて居るのである。その事は今更詳しく言ふ必要はない程度々御話して居ることで、所謂統一神教的の絶対人格者を顯はして居るものが佛教である。又平和の精神といふことは佛教が非常に能く教へたので、釋尊は如何なる場合にも柔和忍辱の心を失はない、「質直にして意柔軟に」といふやうに優しき精神を奨勵する、その教は世界の宗教中佛教が最も



冠絶して居る。佛の容貌は慈悲に満ちて、如何に腹を立て、居る者でも一たび佛の姿を拜すれば怒を捨て、最後釋尊の涅槃の時には、獅子のやうな猛獸でも、或は陀那婆神と稱する喧嘩の神様でも、皆争を捨て、平和の精神に歸つたといふことが涅槃經に説かれて居る位に平和の宗教である。佛教ぐらひ大平和主義を教へて居るものはない、基督教などは平和を口にしなから戦ばかりして居る、彼の歴史は血に穢れて居る。唯一神教や對立神教といふものは本當の平和がない、自分の信する神だけが善くて他の神は穢れて居ると思つて居る、だから基督教は日本の神々に對して尊敬を捧げることが出来ない、眞宗なども伊勢の大廟に參拜が出来ない譯であつた。法華經の統一神教は、絶對一であると同時にその活現を無限に認めて居る、天月は一なれども水月は萬水に宿るといふことを以て、如何なる神佛でも之を尊敬する觀念を失はない。是は釋尊の阿含の始から説か

れて居るもので、即ち三寶に歸依すると同時に、念天といつて諸天善神を尊敬する所の宗教觀念を共に許したのである。であるから顯本法華宗の回向文でも「開述顯本法華經中常住の一切三寶、護法護國の諸天善神」と唱へるのであつて、三寶と諸天善神といふものは佛教に於ては許されて居るのである。他の宗教にはそれが無い基督教などは唯一神教なるが故に、他の神々を尊敬することを許さない、そこに宗教自ら争を起すやうなことになるのである。其他基督教などは殺伐な所があつて、平和といふ觀念に乏しい、マホメット教などに至つては一層甚しい、マホメット教は基督教が轉化したものであると言はれて居るが、或る意味に於て基督の精神を體現したのであらうが、それは劍を提げて居る、左の手にコーランを持ち、右の手には劍を持つて、言ふことを聽かなければ打斬るぞといふのである。さういふことは佛教と全然反對のものである。國が場合に

依つて戦争をするといふ國家擁護の戦は別であるけれども、宗教が表面から劍を持つて戦ふなどいふことは洵に好くないことである。日蓮聖人が刀を持つて居られたといふことも、決して人を斬る刀ではない、自ら迫害をされるのを防ぐ爲に一時持たれたのである、聖人が持たれたと傳へられる珠數丸の劍は、今日遺つて居るのを見ても洵に麗かなもので、決して人を斬るものではない、その刀の中に轉輪聖王の稜威の光のやうな意味合と、法華經の大理想が輝いて居ることを感するのである。講談雜誌に佐藤中將がこの珠數丸の記を書かれて、自分にも何か書いて呉れといふことで自分の意見を書いて置いたがそれは實に立派なものである。であるから日蓮聖人が刀を持たれたからといつても、それは宗教の信仰の上のものであつて、決して戦だの争といふやうな穢れた意味のものではない。

つて居る宗教が最も好いのである。併し又君國の爲に盡す場合に武力を否定するやうな、トルストイの非戰論といふやうなものはまた間違つて居る、國家が在る以上は正當に國家の威力を發揮しなければならぬ必要もある。或は防衛の爲に、或は不正を懲懲する爲に、轉輪聖王は劍を持つて立つて居る、それは言ふまでもないことであるが、宗教それ自身はさういふことを爲すべきものではない。左様にして宗教上の考察としては、絶對人格を信するといふことゝ、有ゆる點に平和の努力をする宗教でなければならぬ、而して佛教は實にこの理想に合したものであると考へる。

### 五、人身觀よりの考察

次に考へて置くべきことは人身觀よりの考察である、即ち人間そのものに付ての考へ方が大事である宗教といつても何も論理や理屈ではない、人そのも



のを説明するのであつて、人間とは何ぞやといふことが實際の問題である、それに對して正當なる教を持つて居るものでなくてはならぬ。

その場合には色々問題もあるけれども、先づ主なることが二つある、一は人間の肉体は一時的のものであつて生滅するけれども、その心、魂といふものは永遠の存在である、所謂靈魂不滅といふことを徹底的に考へることが宗教である。神様が魂を拵へたなどといふことも本當の宗教ではない、拵へたものはまた壞されるといふことがあるのであるから、不生不滅の生命を有するものに於てのみ、眞の宗教といふものは在るのである。我が魂は何れより生じたるものに非ず、何れに消去るものに非ず、本來存在して居るものであるといふことを徹底的に考へる、それが眞の自己である。この人間の姿が自己ではないこの肉体の中に生きて居る生命、心、それが即ち眞の自己である、手は自分のものだといつても、一旦

この生命の不滅がはつきりしなかつたり生命の内容が左様に貴いことを知らなかつたりする宗教は價値がないのである。殊に生命の内容に貴きがあるといふことを知らないで、罪の側からのみ解釋して居る基督教などは、その點に於て實に薄弱なる宗教である。蛇に騙されたから罪があると言ふ、一方では神の子といひながら、罪の子である、神の子そのまゝ罪の子だといふ變なことを言つて居る。神が罪の子を生むといふのはをかしい、況や蛇に騙されるやうな生み方も拙い譯である。罪惡といふものは、人間に罪はあるけれども、その罪は横から附いて居るものである、鏡を曇らせて居る塵のやうな意味に於て説けば宜いけれども、人間の心を炭團のやうに解釋して、割つても、眞黒で、中の中まで罪に穢れて居るといふやうに説いてはいけないのである。本性は立派なものであるが、表面が罪で穢されて居る、けれども遺方に依つてはその罪は直ぐ消える、月に

切つて捨て、アルコール漬にしてしまへば、自分の手であつて自分のものではない、唯だ自分の血液が通つて居る間だけ自分の體と思ふだけのものである左様にして段々切捨て、行つたならば、眞に自分の魂のみが自己である、その魂は永遠の存在であるといふことを確實に証明し得たるものが宗教である。それから第二は、その確實なる存在の魂の中に包まれて居る性能が非常に優れたものであるといふことである。即ち不滅の生命の中に靈性が存在して居る、それを聞き出せば神となり、佛となる貴いものを持つて居るといふことでなければならぬ。この人間の心に限なき貴きを持ち、それ一つが現はれたならば實に偉大なる活動をする所の佛の性質を有つて居る。生命も無限に活躍するし、それが智慧に於ても慈悲に於ても、救済に於ても、無礙自在の貴きものを人各々が持つて居るといふ、この精神の絕對價値を認めて居る宗教でなければならぬ。

義雲がかゝつて居るやうなもので、清風一陣吹來れば皎々として輝くものである。柿が澁いといふけれども、その澁い中に甘味が含まれて居るのであるから、一晚微温湯に漬けて置けば翌朝は甘くなつて居るといふ風に、この甘味のある所を本當に教へる宗教でなければならぬ。何時まで経つても澁いものだ、苦いものだといふ風に、人間を罪惡性に説くといふことは最も恐しいことである。現代の文明が過つて來るのは、自然主義の文學で、人間といふものは醜いものだ、詰らぬものだといふことを盛んに言ふ、「人間の魂を割つて見たならば、慾張根性、色慾根性といふものばかりではないか」と言ふ、だから偽らざる告白といつたならば醜いやうなことがかり説いて居る。偽らざる告白といふ場合に、少しでも善い事をしやう、力は及ばぬけれども志を立て、……といふやうなことがあつたならば、それは嘘だ、飾つて居るのである、も



う一つ打割つたならばそれは醜いものだといつて人間の魂の奥が穢れたものやうに言ふ、それが今日を過る自然主義文學といふものである。人間の過らざる自然といふものは、表面には左様な卑しい考へもあるけれども、もう一つ中を割つて見れば佛と等しい貴いものを持つといふのが、過らざる自然主義

なのである。そこをしつかり打込まなければ宗教の値打はない、現代の青年が墮落しつゝあるのは、この過れる自然主義に依つて、滔々として腐敗墮落して居るのである。それを宗教がまた一緒になつて罪の子といつたり、罪障ばかり説いてはいかぬ、罪障はあつても所謂「衆罪は霜露の如く慧日能く消除せん」といふことになるのである。罪といふものをさう恐れさすよりは、徳の光を現はす教でなければならぬ。是は教育の方針に於ても、人間は斯ういふ事をしてはいかぬ、あゝいふ事をしてはいかぬといつて、悪い事を戒める側よりも、斯うすれば善くなる

あゝすれば良くなるといふ建設的の側を十分に教へて行なければならぬ。叩込み主義の教育は効果が極めて少ないのである、徳性を發揚することに努めなければならぬ、所謂「智能を啓發し徳性を成就す」といふ、この啓發成就といふ風に積極的に行かなければならぬものである。

さういふことを考へて偕て佛教を見ることがどうか、佛教の中でも誤解されたものは人を罪として見て居るけれども、釋尊の本意は決してさうではない、阿含に於ても「自ら其の意を淨くす是れ諸佛の教」と説きさうしてその心は本性清淨である、恰も蓮華の如きもので、泥の中に美しい華を開くべき性質があるといふことを説かれて居る。

更に法華經に來ればその意義が完全に説明されて吾々の心は始なく終なき實在であつて、その中に佛性を具へて居る、それを開けば佛と少しも違はないものである。佛は十五夜の月の如く、我等は毎日の月

若くは三日月の如きもので、微かな光しか放たないから小さいやうに見えるけれども、小さいのではない、光る部分が隠れて居るので、三日月も十五夜の月も月の體に於て違ふものではない、蔽はれたるものを取れば全然同じものであるといふ風に人間の佛性を讚歎せられて居るのである。「我深く汝等を敬ふ敢て輕慢せず、所以何となれば汝等皆菩薩の道を行して當に作佛することを得べきが故に」といつて人格に尊敬を拂つて人を向上せしめた、その宗教でなければならぬ。人間を侮辱してお前は罪の者である蛇に騙された、鬼が足を引つ張つて居るといふやうな、悪い側ばかり言ふて聽かして、怖れさせて信心をさせるといふことは下等な宗教である。下等な人間は又それでなければ信心が起らぬ、信念の上等か下等かといふことは直ぐ分る。子供を集めてもお前はのらくらして居つたならば年を取つてから養育院へ行かなければならぬ、さうして一つ間違へ

ば鉄道往生をしなければならぬぞといつて、非常に落ぶれたやうな事を言ふて聽かして、「さうかな」と思つて精を出すやうな人間は下等な人間である。上等な人間はそんなことでは動かない、お前は勉強さへすればどんな偉い人にもなれる、王侯將相何ぞ種あらん、總理大臣にもなれる、日蓮聖人のやうな人にもなれると言はれて、「さうかな」と思つて奮發する、それが立派な人間である。それを懶けて居ると不良少年になるぞ、乞食になるぞ、飯も食へなくなるぞ、養育院へ行かなければならぬぞといふやうに、脅かされて始めて動くやうな者は大した人間にはなれないのである。

そこで人を教化する宗教が、さういふ消極的な唯脅かし文句だけで立つて居るやうなものは價値の無いものである。その意味合は釋尊の教を見ればその通りに説かれて居るのである。



## 六、人生観よりの考察

もう一つ考ふべきことは人生観よりの考察であつて、即ち人間の世の中に付ての考へ方である。人生といふものは思ふやうにならないことが澤山ある、所謂「浮世は儘ならぬ」といふ事があることを知らなければならぬ。であるから浮世には決して感溺してはいかぬ、浮世に於て思ふが儘に享樂を得やうと思へば、必ずや不平に陥り或は煩悶に陥る、意の如くならざるに意の如くやらうとするから、必ずや一方に叶ふた時には一方には缺けるやうなことになる。次から次へと色々な苦痛が襲ふて来て、最初に甘く考へた人生の喜びは少しも味ふことが出来ない所に不平が起り荒つばい奴は不平よりして悪化するし、弱い奴はそれが爲に悲觀するやうになつて来る。そこでこの人生を皮相から見た執着、感溺の考へ方がいけないのである。又人生に苦しみが多

主義、社會主義のやうな觀念は釋尊の時代にもあつたのである。それを排斥して佛教は、現在の上にも眞の幸福を得られるものではない、有爲轉變の世の中生老病死、會者定離、さう思ふ通りに行くべきものではないといつて、人生の着慾精神を戒しめ、併ながら徒に悲觀に陥るべきものではない、この人生に處しても信仰に依つて心を立直せば面白い事も出来て来るし、そこに人をも救ひ、功德を積んで、我身も救はれる働が出来るといふことを以て、人生に生きる道を教へられた。厭世悲觀の婆羅門の誤謬を指摘せられて、力強き人生の活動を促されたものである。斯様に世の中に酔拂はないやうに、さうして世の中に腰を抜かさないやうに、本當の中正不偏の活き方を、精神生活の力に依つて與へて行くものでなければならぬ。

この意味に於ても佛教は最も優れて居る、始めからその二つの弊害を見て起つた宗教である。即ち凡

いからといつて、悲觀してへこたれてはいかぬ、この着世の害と、悲觀の害といふものを能く教へる宗教でなければならぬ。宗教が手傳つて、「信心をしたならば甘い物は食いたい放題だ」といつて、人間の感溺性を煽動刺戟するやうなものを以て宗教と考へて居るならば大間違ひである、そんな化の皮は今後の文明が引剝いてやらなければならぬ。殊に教育家の手に依つてさういふ宗教は膺懲されなければならぬ。宗教が今日必要になつて来たのは、教育が現實主義で唯だ現在の享樂といふやうなことばかり言ふて居るから、人心が頹廢し思想が悪化して行詰りを生じたのである。であるからこの人生感溺の迷を覺ましてもつと高等なる精神生活に導かんが爲に宗教を迎へるのである。その宗教が矢張現實を煽るやうな淺間しき宗教であつては役に立たない釋尊の時代にも順世外道といつてさういふ婆羅門があつた、何れも彼も現在に依つて一切を判斷せんとする今の唯物

夫行の着慾生活を戒め、婆羅門行の悲觀厭世を戒しめて、中道を歩めとして起つたものが佛教である。さういふ風にやらない坊主や宗派があつたならば「それはいかぬ、お前は佛の教に背いて居る、又時代の要求にも合はないものであるから顔を洗つて出直せ」……斯ういふことを理解して掛からなければならぬ。

それから人生は左様に無常のものであるから、絶對といふことは少ない、何事でも安全であるとは言つても程度の問題である。自分の家を如何に安全にして置いた所が、地震があれば引繰り返る、火事で焼けないとは言へない、爆弾で破壊されないとはいへない、建築の如きでもさうである。又親子の關係夫婦の關係、一切の人事の關係も、如何に注意を拂つても何時どういふ變化を來さぬとも言へないからそこに絶對といふものは無いといふことを知つて居らなければならぬ。初から餘りにそれを確實なもの



と思ひ過ぎると、そこにまた悩みを起すから、如何に信仰に住してもどのやうにしても、人世のことはさう絶對的のものではない。總ての問題が世間法である、さうそれに拘泥して心を悩めたり腹を立てたりすることはない、正しき信念に立つて人生に處する以上は、苦しいことが來てもその苦しみを飛越えて、さう苦しみの爲に悩まされないやうに、その代りに又楽しいことがあつても、調子に乗つてふはふはしてはいけない、苦樂共にそれを引締める力を持つて居らなければならぬ。苦に對しては對抗する力を持ち、樂しみに對してはそれを引締める力を有して、如何なる事でも來れ、我には我の天地ありといふことを考へて居らなければならぬ。人生の外部から現はれて來る事に一々自分の精神を動搖せしめて居つたならば、一生涯眞の安定を得られるものではない。

さういふ意味に於て眞實の事を教へる宗教でなければならぬ、實はそれが宗教の値打である。十分に訓練せられた百練の鉄の如く、正宗の銘刀の如くに身は細いけれども折れない、傷付かない、振れないといふ、鍛錬された信念でなければならぬ。宗教の信仰は左様にして人生に處する人々の心得を、善きに付けても惡きに付けても、如何なる場合に處しても舉措を誤らぬやうに人を訓練して行く、完備した宗教を理想しなければならぬ。其の意味に於て考へる時、佛教はまたそれにびつたり合格して居ることが能く分る。

斯様な点を判斷の標準に置いて、今日及び將來の宗教を選択すべきものであらうと思ふ。

以上はざつと自分の考へ浮んだことを申述べたのであるが、文部省あたりが一國の宗教を復活せんとするに付ては、相當の勞力と經費とを費して、宗教選擇の基準如何といふことを本格に研究して、國家の爲め人類の爲め、完全なる宗教を復活することに

# 末法の佛教

會費 貳拾錢 七拾貳錢 壹圓四拾四錢  
(送料共 同 同)

末法の佛教は大聖人の御魂の叫のそのまゝです。この叫びにお互は覺醒し精進して眞の生の喜と幸福を味ひませう。

- 一、大聖人御遺文を毎月發行するのです
- 一、文体は全部かなが付て居ります
- 一、難解の文には略註がありませう
- 一、毎號聖蹟か聖傳か聖筆の寫眞が入れてあります
- 一、實費で御分ちするのです
- 一、見本御入用の方は金十錢封入御申込み下さい



東京淺草清嶋町 統一閣圖書部  
 東京四谷南寺町法恩寺 御遺文普及部  
 東京神田三崎町二ノ二 興社



# 立正大師の功勳

本 多 日 生

それから第二の本門の題目といふのも、單に本門の題目と言つてもわからぬ。それはただ題目と言つたならばお釋迦様を忘れても宜いか知らぬけれど、本門の題目といふのは、釋尊のお功德、釋尊の御力を通して吾々を救ふ所に本門の題目といふことがあるのである。即ち本尊鈔に、

「釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す」

とあつて、釋尊が因行の菩薩行に積んで下された功德も、それから本佛として衆生濟度をなさる功德も、その釋尊の廣大なる御功德が南無妙法蓮華經の中に包まれて居る、であるから我等一たびこれを信解すれば、彼の功德を譲り與へ給ふのである。その

功德といふのは何であるか、題目の中に本來文字に引附いて居る、字に妙といふのがあるから……といふ譯ではない、功德は何も文字に附いて居るものではない、釋尊の因行果徳の廣大無邊の功德が、妙法蓮華經の五字に具足するのである。「我等この五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を譲り與へ給ふ」とある、彼の因果とは即ち本佛釋尊の廣大なる功德が、題目を通して吾々に與へられるといふことである。だから本尊鈔の結文にも、

「佛大慈悲を起して妙法五字の袋の中に此の珠を裏みて末代幼稚の頸に懸けさしめ給ふ。」

とある、この珠といふのは即ち釋尊の廣大なる功德である、その廣大なる功德を裏みて我等にお與へ下

さるのであるから、釋尊を除外しては題目の袋だけで、中身の功德の珠が無くなつてしまふ譯である。袋ばかりの題目ならば何處にもある、釋尊の大慈悲といふものを吾々が感激して、「あゝ有難い」といふ釋尊の慈悲に感孚することに於て、吾々に與へられたる南無妙法蓮華經を受持するのである。又母の食物が乳となつて赤子を養ふが如くに、釋尊はお母さんであり、南無妙法蓮華經はお母さんの乳房であり、我等は信念を有つてその乳房に吸ひ付いて大きくして貰ふ赤ん坊見たいなものである。母の食物の乳となりて赤子を養ふが如し、母とは本佛釋尊なり、乳とは妙法蓮華經の五字なり、このお母さんと乳房といふ關係に依つて題目を了解するのが、それが本門の題目といふものである。

釋尊などはそつち除けて、題目さへあつたら何處へでも行くといふ豆絞りの阿哥式の題目といふものは、これは宇宙神教の題目と言つて、眞言の題目で

ある。眞言では阿とか吽とかいふ字の中に何でも入つてしまふ。だから南無妙法蓮華經と言ふても何も意義は無い、たゞさういふ梵音といふもので、意味は説明出来ないものである、囊莫三曼陀とか阿吽とかいふ、其代りに阿といふのは烏が鳴いて居る「ア」もお釋迦様が言ふ「ア」も同ものである、「阿」と言つて口を開いたならばその中から一切のものが出て来る「吽」と言つたらそれで一切が終ひだと言ふやうな事を言ふのである。これは印度にはさういふ言葉に意味を含める一つの傳統思想があるから、「ア」は何であるとか「ウン」が何であるとか「サ」が何だとかいふやうに、自然音に對してさういふ意義を傳統的に印度人は認めて居る。併しそれは世界には通用しないものである。そんな事は互に許し合つて居る國民の間には行はれるものである。日本に於ても神道の方にさういふ事を唱へる學者があつて、「め」といふやうな言葉を重んずる、それは芽が吹くのたとい



ふやうなことを言つて、木の芽も人間の眼も同じやうに考へてしまふ、或は女根までも皆な「め」ぢやと言ふ、さういふ言葉に非常な意義があるやうな事を言つたけれども、そんな事はたゞそれを盲從的に信する者の間に行はれるだけのことである。

日蓮聖人の弘められた題目は、さういふ眞言的理由もわからずに何でもその中から出て來るといふやうな、大黒様の槌みたやうに、何だか知らぬけれども叩けば寶が續々出て來る、さういふものではない。釋尊の大慈大悲に依り、釋尊の廣大なる功德を譲り受けるといふ、ちやんと人格者がそこにあるのである。大黒様の槌のやうに、何處から持つて來たか譯のわからぬ槌ではない、この槌は釋尊のお持ちになつて居る槌であつて、釋尊の因行果徳の功德が此中に籠つて居るといふ、ちやんと人格者を認めたのが本門の題目といふものである。それがわからな

いのは學門が足らぬのだ、他の坊さんはいろ／＼のす、その事を決定する場所を壇と言ふのである、たと壇の方ばかり考へたところが、その善惡といふことをさめる戒といふものがなければ、何にもならない。

然らば何を本門戒と言ふかと言へば、即ち今申すところの法華經の思想を中心にして考へたら、佛としては絶対の本佛を信じ、經典としては法華經の價値あることを認め、さうして總ての思想がその基準に基いて裁斷されて行くといふことが、それが本門の戒といふことになつて來るのである、その信仰、その道徳、さういふ觀念を無視しては本門戒といふものは無いのである。一比較山にあるからそれは本門の戒壇だ、「富士山に建てたら本門の戒壇だ」そんな建物の場所などを何處へ持つて行つたつて、その内容に於て法華經の今申す本門の大精神といふものが明かにならなければ駄目である。本門の精神と言へば、宗教的には釋尊を絶対の佛と見なければ

事を言ふけれども、そこまで行かなければ日蓮聖人の主張せられた本門の題目といふ意義が成立たないたゞ「これは壽量品の題目ぢや」……「これは方便品だ」……そんな事を言つて見たところが同じ題目ではないか。それは今言ふやうな意識觀念に依つて、同じ題目でも萬有神教的に考へる題目と…釋尊の統一神の上から結びついて現れて來る題目といふものは分解が出来る、從來日蓮門下の多數に論議せられたやうなことは、極めて幼稚な無學の産物であつたと申して宜しいのである。

モウ一つは本門の戒壇であるが、これは我が朝廷がこの法華經を御信仰になる時に、最勝の地を選んで、そこに大成壇堂を打建てる日蓮聖人は言はれた。それは形の方に就て戒壇の壇の方に力を入れ、ばさういふことになるのであるけれども、本門戒といふもの、實質は、やはりこれは精神的善惡の道徳の基準である、戒といふことは惡を止めて善を作らない、修養のことに就ては菩薩行を行じなければならぬ。さういふ宗教的の信念と道徳的の修養とそれから哲學的の理智といふものが法華經の大精神に徹底されて、さうして他の文化と融合調節を取つて進んで行くといふ方針の決定することが本門戒の中心思想である。この戒壇に就ては、細かい事は日蓮聖人がお示しになつて居らぬから、はじくる必要はないので、大体さういふ事を國家が御決定になる時が來たならば、その大精神の下に定めて行けば宜いのである。一々細かい事を、建物がどんな風な形であるとか、そんな形式の説明などは日蓮聖人は考へて居ない人である。

今日にしてこの問題を考へて見ると、舊來は萬事朝廷がさういふ事に就ても御決定になつて居るのであるけれども、今後は單に朝廷がひとりさういふ思想の事を御決定になるといふ譯にも行かない、最後は朝廷の御裁斷に俟つのであるけれども、やはり國



民がさういふ輿論といふか、風潮を造らなければならぬから、今本門戒壇建設に努力すると言つたところ、たゞ一概に國家諫曉といふやうな事のみをやつてもいけないと思ふ。先づ内國民の間にさういふ思想の宣傳を爲し、日本の支配階級に對してこの思想を打込んで、さうして朝廷がこれを御採用になるやうな順序を歩んで行くことが本門戒壇建設に努力する所以である。であるから日蓮聖人がその遠大な希望を日本國に囑せられて、法華經の大精神を文化の中心に置いて樹立したいといふことをお考へになつた、その點は何處までも大切にしなければならぬ。それを實現して行く方法等に就ては、その時代の變化に伴うて大に考慮を要する事であると思ふ。而して本門戒壇建設の事柄は、聖人に於てはその功を爲し遂げずして御入滅になつた譯である、三大秘法の中に於ては、本尊の光顯と題目の流布をお圖りになつて、戒壇の事は遂にその實現を見ずして卒つ

たことになつて居る。そこで本尊や題目といふことに就ては、どうしても毒量品の思想に歸つて研究せられなければならないと思ふ。日蓮聖人の弘められた中に眞言の系統に屬するやうな思想、或は又淨土門に影響せられたやうな思想もだん／＼あるけれども、それは彼等を屈服せしめ、彼等の信仰を改めさす上に執られるところの方法であつて、その時代の影響として免れ得ない事である。併し純粹に今日法華經の研究として立つならば、それは開目鈔の思想が最も宜しいのである。開目鈔では眞言などを向ふに廻して、眞言の誤れることを指摘してこれを論破せられたのである、淨土宗や禪宗などは所謂鐘袖一觸一言ふに甲斐無き禪念佛」と言はれて、少しも色艶を有つて居ない。却つて曼荼羅であるとか題目を唱へるとかいふその事は多少淨土門の稱名念佛と法華の唱題行、曼荼羅圖顯と眞言の兩部曼荼羅といふやうなものは、その形、な、そんな者が日蓮門下であると稱して、それを笠に冠つてどこまでも生き永へようといふことは怪しからぬ話である、どうしてもそんな事は許さるべきものでない。今日でもそんな者が集つて學校を拵へて大學ナンといふものを建て、そんな事を研究して何になるか、さういふ嘘の事をして迷信を澤山存續して置いて、その中から學資金を貰つて學問をする、「マア、あまり喧しく言ふたら米櫃の米が無くなるぞ」と言つて研究をやつて居つて、決して本當の宗教の研究が出来るものではない。モウ少し純潔なる宗教として考へなければならぬ。それを吾輩一人日蓮門下にあつてきつゝい事を言ふやうに言ひ成すといふことは以ての外の事である。彼等の間にも少しは志ある者もなければならぬ、そんな事を何時迄も平氣でやつて居るナンといふことは實に大聖人に對して相濟せぬことである。私の言ふのは、どこまでも聖人の功勳はさういふ乱雑な誤りに陥るや

その様式の上に於て似て居る所があるけれども、開目鈔に於て絶対本佛を光顯せられる時の意氣込みといふものは、少しもさういふ他の宗旨の影響などは考へられて居ない、單純に法華經の中心思想からこれを發揮せられた。であるから法華の精髓發揮者としての功勳は開目鈔に於て絶対本佛を光顯せられ、さうして題目に就ても釋尊の功德から説明をなさるところの本尊鈔の意味に於て題目を唱へしめられたのが、日蓮聖人の本旨である。たゞ題目さへ唱へて居ればそれで宜しいといふ、風來題目、眞言題目みたやうに、無條件で何處へでも飛んで歩くやうなものをお弘めになつたのであるならば、或は日蓮法華を誤るといふことになつたかも知れない、さういふものが宗教として弘まつて行くナンといふことは、佛敎の根本精神を紊るものである、譯のわからない婆羅門のやうな事になつてしまふ。題目さへ唱へて居れば狐を拜んでも狸を拜んでも宜いといふやう



うな題目を弘め給ふたものではない。日蓮は唯法華唱題の行を弘め給ふたナンといふことは皮相な解釋である。日蓮聖人は法華經の精髓を本佛に取つて、本佛と因縁無き本尊や題目は日蓮聖人は最後に於ては否定して居るものであると言はなければならぬ。であるから「佐渡己前の法門は佛の爾前の經と思召せ」といふことは今申す本佛光顯の事を言ふ時に言ふて居られるので三澤鈔の文を十分強く考へて見たらわかるのである。

(大號完結)



## 日什大正師略傳

### 第三回

#### 故權大僧正 竹内日照師記

#### 四、改宗

上人は我れ死を恐れざれども年來の大願を成就せんと欲せばしばらく其難をさくるにしかじとて即夜善如房と共に羽黒山のうしろよりのがれ釜窟に至つて其危難をさく。學僧等夜半其室を襲ふたが上人の影がない。惡僧等は事の意外に驚き急に學生を一堂に集め此由を告た。學徒曰く「暗夜なれば遠くは行くまじ此處か彼しこに潜伏して夜明けを待ち居ることなるべし」と提灯たいまつをたづさへて四方を搜索したが見當らぬ彼等は謀言のあまりに早く露見したるに驚くばかりであつた。上人の釜窟に居ること三日三夜檀徒日出山又次郎上人の危難を聞き大いに驚き郎黨を從へて上人を釜窟に迎へて我家に招待

#### 華嚴經「入法界品」

△師子の筋を以て樂絃と爲すに、其の音既に奏せば餘絃悉く絶つるが如し。

菩提心の筋を以て法樂の絃と爲して、其既に奏せば、一切の五欲及び二乘の諸の功德の絃悉く皆斷滅せん。

△迦陵頻伽鳥の卵殻の中にあるや大勢力あり。生死の殻に於て菩提心を發すに、所有の大悲功德の勢力は、聲聞緣覺能く及ぶ者なし。

した。法華經に「諸天善神は法華經を信仰し法華經を説く如く修行する人を守護する」との經文は正しく上人の此事蹟を事實に物語るものではないか實に佛語むなしからずである。

敵あれば味方がある。中には上人の人格と識見に絶待の服従をさげ師弟のちぎりを結ばんとして其後を慕ひくる五人の青年僧侶があつた、これは後に日津六老僧と稱した。大法宣傳の門出に、同志六名を得た上人は、さぞ氣強く感ぜられたことであらう是實に天授六年(北期康歴二年)上人六十七歳の時であつた。是より六人の門弟と共に旅したくをとへのへ會津を出て奥州白河の關路を過ぎて武藏野に入り



先づ日蓮聖人の眞蹟を藏する下總の國眞間の弘法寺  
 中山の法華經寺をたづねた、當時眞蹟の大部分は兩  
 寺の管理に屬して居つたものと見える。日什上人  
 はつゝしんで眞蹟の拜觀をこふたが他門僧徒の身  
 分にては許さざりしかば、天授六年三月二十三日一  
 通の歸伏狀を提供し、さうして眞蹟の全部を精讀し  
 明かに一代佛敎の眞髓を托住することを得た。  
 既に開目鈔如說修行鈔に依つて了悟したる所信は  
 更に堅實となり愈々日蓮主義の本領を發揮せんとす  
 るに當り關東諸國の御遺跡たる房州の地、池上鎌倉  
 身延の諸山を始め日蓮聖人の直弟たる六老僧の跡を  
 も尋ねた。

### 五、經券相承

日蓮聖人池上に滅を示してより僅かに九十年ではあ  
 るが、直弟の六老僧門下の中には是非の争ひを起して  
 居る甲乙互に非議して富士の日興門流では五人謗法

富士正義と威張つて居る、五門徒の方では日興の門  
 下を墮獄の徒輩だと呼んで居て此外附弟だ嫡弟だと  
 かで争つて居る、而して悲しいかな日蓮大聖人の一  
 代の間肝膽を砕いて弘めたる、本門の本尊、本門の  
 戒壇本門の題目、ともに、皆その本義を失ひ一宗徒  
 らに紛駭するばかりで法國冥合の大業に努力するも  
 のは殆んど無い所謂化儀法理共に大上人の御精神に  
 違背して居る「我れ日什は是れより經文と日蓮聖人  
 の御遺文を師と頼み、直に日蓮大聖人に歸伏し奉り  
 經卷相承直授日蓮の旗を翻へし、一天四海皆歸妙  
 法の聖業に努力せん、且つ身はかろし法は重し身を  
 死なし法を弘むるは大聖人一代の行化である。吾れ  
 老衰に至るといへども餘命を大法と國家に捧げ、  
 いかなる艱難苦痛ありとも努力退轉せし」と誓願し  
 た時、上人の御歳六十八であつた。(次續)

### 知法思國會第二回懇談會

維時昭和三年十月十三日立正大師御會式の日知法思  
 國會第二回の懇談會が麴町區有樂町日本俱樂部に開  
 催された、前回と同様三十七名の出席者を見る。

男爵

- |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 永 | 高 | 田 | 龜 | 梶 | 川 | 岡 | 本 | 林 | 磯 | 井 | 伊 | 井 | 今 | 井 | 岩 | 井 |
| 井 | 木 | 中 | 岡 | 木 | 原 | 嶋 | 多 | 部 | 上 | 東 | 上 | 成 | 村 | 野 | 上 | 清 |
| 米 | 省 | 道 | 豐 | 顯 | 太 | 伊 | 三 | 滿 | 太 | 三 | 日 | 日 | 日 | 直 | 純 |   |
| 藏 | 三 | 郎 | 爾 | 二 | 正 | 郎 | 八 | 生 | 郎 | 事 | 郎 | 光 | 警 | 威 | 英 | 純 |
| 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 |

(いろは順)

- 午後五時開會に先ち、出席者各位の交名紹介あり  
 やがて岩野幹事より今晚の差定「刑事事件を通じて  
 見たる思想問題の過去現在及び將來」の講題に就て  
 林頼三郎閣下の講演ありて後、晚餐に移り、終りて  
 「健全思想の涵養に關する理論及び實行方法」に就
- |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 鈴 | 望 | 釋 | 神 | 柴 | 三 | 皿 | 坂 | 佐 | 佐 | 寺 | 小 | 福 | 松 | 山 | 矢 | 野 | 中 | 中 |
| 木 | 月 | 保 | 田 | 吉 | 井 | 本 | 藤 | 藤 | 澤 | 林 | 原 | 本 | 本 | 田 | 野 | 口 | 村 | 村 |
| 日 | 日 | 眞 | 辨 | 一 | 顯 | 泰 | 太 | 萬 | 一 | 萬 | 一 | 有 | 英 | 日 | 藤 | 清 | 吉 | 一 |
| 雄 | 謙 | 警 | 靜 | 能 | 隆 | 巖 | 造 | 郎 | 郎 | 三 | 郎 | 警 | 信 | 二 | 茂 | 主 | 吉 | 一 |
| 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 | 氏 |



て各自意見の交換致度旨を述べられ、こゝに開會を告げられた。  
「林閣下の講演は他日速記録を載録すべきに付、こゝには之を略す」

### 晚餐後の席上に於ける懇談の概要

井上清純閣下

近頃問題である布哇ギル殺の事件に就て始めは排日に持つて行く傾きがあつたが事件の進行につれて漸く解け却て社會の欠陥が知れて反省して來た。吾等も社會的の欠陥を自分に引向けて考ふべき事ではないかと思ふ、されば社會主義者の事も吾等、大に反省せねばならぬのではないかと彼等が社會人類に福祉を齎す事と思ふてゐる事についても考へて見たい、彼等が檢舉された當日内閣諸公が懇親會とかで遊興してゐるのを見て變に感じた、かの世界大戦が終つた報がロンドンに達した時にロイドジョージ首相は演説中であつたにも拘らず之をやめてお互に天帝に向つて感謝しようぢやないか諸君一所に行かぬかと自らセントポール寺院に趣いて感謝したと聞いてゐる。又昔の宰相は牛の囁きを見てさへ反省したといふ、然るに今はどうですか、これは甚だ遺憾な事だ世間の學者、宗教家は色々申さるるが、それは身命

が何も知らずに宗教を捨てた欠陥で、日本であるからこれで治まつてゐる、若し支那や印度であつたらばどうか、これからは宗教文明を打建てねばならぬ、そして今後の教育は婦人の教育に重きを置いて大きな正しい信仰で子弟を養育して貰いたい、永いやうな話ではあるがこれが一番大切ではあるまいか、此國家の大事に當つては黙することが出来ない、何か話せといふ事でしたから此事を一言致しました。

野口日主師

今回思想問題が起つた上は政府始め下は各團體で善導しようとしてゐるが眞に力あるものは日蓮主義より外にはあるまい、知法思國會の與るは當然である法華經の精粹、日本國體の精粹を中心にした日蓮主義で、日本國は神國である然るに近代は西洋の眞似の其又眞似をしてあまりに眞似すぎた結果こうなつたと思ふ。

權利を主張するが權は物をとるといふ事で、これはいけない、私共國民は義務である、上の方から見れば下が亂れてゐるとして取締りといふが上に立つ者が先に覺醒せねばならぬ。等々、

柴田一能師

私は今晚は承る爲めに來たので話す爲めではありませぬから別にこれといふまごまごに話はありませ

を培してゐるか、どうか、今日日本には理想がない、小學校、中學校、大學校でも皆固陋な事は教ふるが、人生の輝きは教へぬ、大學生の頭のない者を忖度するに自分は實に恵まれたもの、幸なものと思ふ、魂には何も與へられぬと思ふであらうそこに光も力も何も無い、在學中苦しい勉強して社會に出て會社員とか銀行員になるがそれ丈では甚だもの足りない、そこで呪となる、世相を熟視して欠陥あることを知らば宜しく改良を計るべき事である。申すは畏れ多いが皇室の經濟苦を漏れ拜しては實に黙する事は出来ない、今日國民は皇室が非常にお苦しい立場にゐらせらる、事を拜してもつゝ其の御威嚴を高めねばならぬ、内外使臣の拜謁の時でも時間には甚しく制限され給ひ、常に一定の型にはまつたお不自由なあまりに規則づくめであらせせらるゝ事は畏れ多い、又行幸等の場合に劍付鐵砲の警備嚴重である事を何と拜しますか、私共は心から有難いと拜さねばならぬに此の劍付鐵砲の物々しい武裝は甚だ不快で、とても拜観するに忍びませぬ、皇室の談は不敬に涉つては畏れ多いから止めますが政事家は大なる教養ある思想家人格者でなくばいけない、議會に於ける議員も其通りと思ふ、次には宗教の力、是を何と見る、今日の國狀は明治時代に青年

ぬ、先程お話し下さつた井上閣下や野口上人の御意見と私の平常の考へあることも、そこにゆくのではありません、いかに改造とか善導といつても、いふ丈けでは何にもならず、不言實行と福澤先生がいはれた通り、上からの實行が示されたならば下はやらぬ譯には參らぬ、今は理窟が恰憫で、反面に精神的倫理進では宗教的實感が忘れられ茲に論議に上るやうに他國民に對し、社界に對しお恥しい、又將來はどうか心配せずにはゐられなくなりました。宗教々々が五六年前から高唱されつつありますが、實際問題はどうかすれば此宗教々育が行はるゝか、教育家たる教員は要するに人格に於て其中心の信念が青年に感化を與へますから、これが大切である、ない袖は振れない、先天的、後天的の修養に於て宗教の力は必ず貴いものを與へます、エマソンが「人格は太陽の光線のやうなものである」と申しました、之は争へませぬ、根本が空しくしては駄目で、熱と光が根本になくしては與へられない、故に我々自身が強固なる信念を持つ事が先決問題でありませう。眞に日本人の人格、それは世界の中心となるべきものといふやうな考へが必要で、今日の如き思想を見せ付けられては宗教々育が最も肝心と思ふ、從來教育と宗教とを分離した結果、今日に至つたので、數字の上からは西洋に對して遜色は毫もない、小學校でも歐米に



は恥ぢぬ、といふが其學校から出た人が現に國體を  
 謬るやうな者が續出するのは論より證據で、教育家  
 の大會に不得已宗教々育を叫び出したのは、苦しい  
 叫と思はれます、日蓮門下に縁ある者が世界國家に  
 貢献しなかつたのは、二重にも三重にも恥入る次第  
 でありまして、心は矢竹にはやつても力がない、幸  
 に本會に依つて先輩諸氏の指導に従つて我餘生のあ  
 らん限り大馬の勞に服したのであります。

佐藤鐵太郎閣下

始に井上閣下のお話し下さつたのは御同意丈けで  
 なくそうありたいものです。今日一寸加へておきた  
 いことは師匠を敬ふ様に仕向けねばなりません、凡  
 てが不眞面目である、これは敬ふ心の缺てゐるから  
 と思ひます。

幾年前でしたか、高橋總理大臣と汽車に同車した時  
 に、先日コンナ話があつたと語り出されましたそれ  
 はこうです、

何日か村長や町長の集りに自分も参加した、そし  
 て教育の効果はどうかねと尋ねたが誰れもが答へ  
 ぬ、そこで更に、たとへば親の命に従ふか、仕事  
 に勵むやうには見へないかと申すと、

一村長は、それは全然反對です、村の青年は親を  
 忘れ、業務に勵みませぬ、恐らく田を耕す者は近  
 き將來にはなくなるであらうと答へますと、外の

ことを教へませぬ、視學などが校長を勝手に動か  
 せたりする不心得の者があつて敬ふことを教へな  
 いのであります、閣下よ、願くば敬ふ事を皆に教  
 へて頂きたいものですと、申上ると高橋首相は  
 尤もだと仰せられたが、其後事實は聞かぬので、  
 政事家は其場限りのものだと落膽しました。三  
 間去つて師の陰を踏まずと申しますが師を敬ふ事  
 を本會でもやつて頂きたいと思ひます。

永井米藏氏

私は東洋モスリン會社にゐる者であります、會  
 社の方で、マルクスエンゲルスの出版豫約をした者  
 が五百位の男工中に三十九名計りありました。これ  
 には私の會社に勤務掛があつて其處に申込めば本屋  
 が一割安くするので書物は皆申込みます、私は彼等  
 直接ではありませぬが、聞く處によれば其本を讀ん  
 でも判らぬ、併しマルクスエンゲルスがこういふ  
 學説を出してくれたから職工の給料も昇り待遇もよ  
 くなつたのだ、買つておく方が宜しかろうといふ事  
 です。これは私共が宗教は判らぬでも經典は判つて  
 も解らぬでも備へてゐるやうなもので、彼等にはこ  
 れが信仰となつては困つたものです、該書が多數の  
 人達の信仰となつては大變で、私はそれが信仰とな  
 らぬやうに皆様のお力で防いで頂きたい。私はよく  
 知りませぬが彼等の學説は煎じ詰むると社會主義と

五六人の仲間も同感ですといつた、が、どうも困  
 つたものだね、と申されますから、私は、

それはあたり前でないですか、今日の教育はそう  
 してゐるので、先生を敬ふことはありませぬ、長  
 野縣松本に三浦壽三郎といふ先生がおりますが、  
 此先生は松本全市の校長であつて皆三浦先生には  
 敬意を拂つてゐました、實に立派な人格者でした  
 又小諸で驚いたのは正木小學校長の尊敬されてゐ  
 る事です、私が坐敷にすはると私と並んで傍に坐  
 られたのが正木先生です、而して私の處に来る人  
 は先生の處にも必ず挨拶するのです、上田や松本  
 等から来る人達も皆さうしてゐました、翌日聞い  
 て感心しました、正木先生は長野師範の校長をや  
 めて故郷の小諸に歸られたが其處の人達が先生に  
 是非校長になつて頂きたいと頼みに行きますと私  
 は金を貰はぬと校長になられぬと申さるゝので、  
 其人達は顔見合せて「何程御入用でせうかと恐る  
 へ」伺ふと、先生は暫く次の居間で夫人と算盤バ  
 チ／＼やつてゐられたが、やがて出て來られて、  
 私の處では毎月四十三圓宛のやうに家計簿がな  
 つてゐるから、この事に皆驚いて恐縮したと申す  
 ことで其人の前には誰もが皆敬意を拂つてゐまし  
 た、實に立派な人格者でした、更に本郷の杉浦先  
 生にも皆敬意を拂つてゐました。處が今は此敬ふ

なり、色々な學説もあるがそれは結局共產主義とな  
 る、私の見聞ではそれは本能を加味してゐないやう  
 に思ふ、どうしても實際に於ては實行困難ではあ  
 りますまいか、人間は向上しよう優勝の地位にどの  
 心を持つこれが人間の本能と思ふ、こゝに共產主義  
 等には大衝突を來すと思はれます、彼の説が本能に  
 合ふや否を調ぶるが一番よいかと思ふので、先日  
 佐藤中將の攻撃法を承はつて大いに感心しました、  
 どうもマルクスエンゲルスの説は本能を加味してゐ  
 ないと思ひますから、其點をお聞かせ願ひたく、ごう  
 か御教示に預りたいものです。

本多日生師

本日は林氏の御熱誠なる御講演に一同満足致した  
 次第であります、又懇談會におきましても種々の有  
 益なお話で、これを繼續致したいのですが、今永井  
 氏のお話について一言申上げて見たい、  
 マルクスやクロポトキン等の近代思想は概観して取  
 目なものは思つたのですが、最近熱心になつて  
 研究しました、そして夫等に就て考察致してゐる爲  
 めに皆様のお話も了解が出来ます。  
 凡そ人間は其能力に於て性質力量に相違あり、生れ  
 ながらにして違ひ又發育に伴ひ相違があります、是  
 を悉く同一とする事は出来ません、人間は決して一  
 様にされませぬ、人種も異へば風俗習慣等夫れ／＼



異つてゐる、智能に於ても書物を好んで讀む人もあれば少し讀んで直ぐに解る者もあり、經濟上に於ても同様に勤惰の差がある此性質能力の相違せる者を均等にせんとして、之を壓迫して行けば、それは遂に最も低劣なものに並行せしむるに至るべきで、日蓮聖人の開目抄にも、概して平等ならしむと仰せられたる如く、人間の優秀なものを一定の楯に入れて棒で引きかき落してしまふと同じく、如此は個人の側から見ても罪惡であります、それは横着者こそかやうの平等を求むるかも知れぬが、苟も天下の志士仁人は全く之を唾棄するのであります。

向上を彼は物質丈けで解決しやうと致しますが、精神方面の向上こそ大きな問題である彼はこの大事な點を放擲してゐます、さういふ馬鹿氣な事は性能を解する上に於て、全く空理妄想であります。

今日パン計りに捉はれてゐるのは明かに人間墮落の證據であります、我々の衣服にしましても、住宅にしましてもすべて物質上の生活には未だ窮迫は來りませぬ、充分餘裕を認むる事が出來ます。これを兎や角申すのは愚昧な生活から來るので、それは決して科學的ではない、生活は合理的であり科學的であるべき筈が、現代は非科學的であります大體思想問題の原則の原則はさう澤山にはない、彼等が稱するものは中間的のもの、不徹底淺薄のものであつ

が飛び出したので嘸ハイカラになつて來ただらうと心配してゐましたが案外で、人前でも子供を負ぶつてゐます。其話によると獨乙では彼等の衣食住とも極めて質素で食事の如きも皆黒パンで一週に一度丈け普通のパン、それから肉も一週一度で、着物の如きも平常着のまゝ何處へでも參るさうであります、極く切り詰めた生活に甘んじてゐます。

親戚の者は先方の農學校長に親しくしてゐましたが其内に子供が生れて間もなく地方に旅行する事となりました時に學長は自分の方に妻君を同居せしめて行けば安心ぢやないかとの親切に、喜んで行くと言つたさうです、此學長は夫婦二人切で、ベツトが二つある切り、これはどうして休まれますかと聞くといふは玄關の藤椅子で寝ますから、妻と奥さんと御一所におやすみ下さいと申されたので、これでこそ獨乙が今日隆々たる恢復を見る次第であると深く感じましたさうです。私は能施太子があつたので深く感じましたさうです。私は能施太子があつたので深く感じましたさうです。私は能施太子があつたので深く感じましたさうです。

水を汲み出された事を思ひ出します、又鸚鵡が山火事を見て其の羽を水に浸しては大火に注いでゐるのを山の神が見て大に笑つた、そこで彼女はさうして自分が此の大火事を見てデツとしてゐられようかと見るに見兼ねてやつてゐると誠意を披瀝したので、山の神も感心して直ちに共力して消し止めたさうです。マルクスにはこのやうな尊い觀察の力はありません。

て、人間の文明を解する原理は哲學であります、人間其物を明かにして事を判断すべきであります、又今一つは天地間に生息するから、天則、自然法に従ひ、宇宙其物の實相によりて判断すべきで、法とは宇宙法と心法、これを妙法と申してゐる、これは法華經ばかりでなく、華嚴經でも亦儒教でも、さうであります、神道でも和魂を貴んで神を敬ふのであります。自然法と人間法は一致してゐるものである、それを宇宙を解して無神といひ、人間を解して無靈魂と申してゐる、そしてクロボトキンは動物を調べ立證したり、ダーウインの進化論でも動物的であります、人間は決して動物的でない、彼等の主張するやうな動物の進化向上したものでなく、寧ろ佛界天界から墮落して來たものであります。基督教でも真理に於ては大いに間違つてゐる、要するに西洋文明はどうしても非真理のものであります、此點は是非明拆にする必要があります、陽明は誠敬と云つたが今は敬を失つてゐます。

佐藤鐵太郎閣下

最近、親戚の者が獨乙から歸つて參つたので、生活狀態を聞きました、それは農科大學を出た若い夫婦せぬ。

岩野幹事

皆さんから大層有益なお話を拜聴致しまして幹事と致しまして責任が果され大いに有難く厚く御禮を申上げます。中々つきないのではありませんが、今晚はこれで閉會と致します。

時に十時を報ず。

◎知法思國會本部は東京市淺

草區北島町十四番地に設置

せられたり事務は同所にて

取扱ふ。

振替口座番號は東京五九一

二二番電話下谷一九〇一番







●八幡鎮本教會堂建築淨財勸募の詳●

名教の樹立は、社會迅速に資し、道法の宣布は、國家の興隆を最るものであると信じます。故に國民の信念が堅固でなければ、眞實の偉業は起らず、大衆の思想が剛健でなければ、價値ある活動は擧げられない、貴ぶべきは名教であり、重んずべきは思想であります。

吾等同人、茲に鑑みる所あり、北九州産業の中樞地たる八幡市の一角に處し、開闢統一の教光を放ち以て除化せんとする民衆の窮路を塞ぎ、救済の正法を傳へて、一乘大善の靈氣を培はんとするものであります。

近時、尅大せる八幡市は、生産工業の地域として、異常な發展を見せてゐます。東洋第一と稱する、商工省直轄の國營製鐵所は、申す迄もなく、現下約百數十萬坪の大工場を有し、幾萬の人員を吸収して隆々たる作業振りを示し、汗の貴さを物語つてゐます。その廣大な規模と精緻な無數の機械と壯大な建築物とを、我が文化の眞相を描く反影縮圖である感を感じしめる。斯の偉大な工場を中心にして日本製鐵、黒崎製鐵、九州製鐵、九州鉄鐵、安川電機、中央セメント、安田製釘、東洋製

鐵、戸畑鑄造、淺野製鋼、東京製鋼、明治紡績、戸畑耐火煉瓦、大阪曹達、其他枚舉に遑ないほどの大小の工場が、西より東へミ洞海灣を浴びて擲石獨立してゐる。現在人口二十萬の市民は、これ等工業文化に慕まれて、生活を續けてゐる事實を想觀した時、そして物質文明の空氣に住み馴れた民衆の心底を探り得た折、そこに或る偉大な何物かを妻はんとして居ればしなうか？ 私かに一種の疑問が自ら湧かざるを得ない。と同時に疑問の扉を開く強大な秘鍵が、先づ求められなければならなくなりました。吾等同人が特に此地をトして、ささやか乍らも、是非會堂の建築を急ぎ企てました理由の一斑は、またそこに

も存する。救済匡濟 傳道を試み、超勝最大の宗教を携へ、而も乘たる星光に過ぎざるその一端を披露して、街頭の民衆に訴へ擬したにも拘らず、醒めたる佛性の所有者達は、貴くも清い歩みを我が本教會へ運んでくれるようになり、今は早や會堂の建築を餘義なくせしめられるに至りました。一心淨なれば萬類亦淨ならん、信火一度點せば黒暗亦輝かんとて體驗を味はばされました。

偉大なる教風を信じ、身命を期して正統佛敎の眞髓を傳へて以て佛祖大聖の鴻恩に酬ひ奉り、素志を貫徹したい企願であります。

大方の諸賢、厚き御同情を賜はり、吾等同人の發願を賛し、淨財を喜捨せられて、斯の聖業成就を助け給はんことを庶幾ふ次第であります。 合掌

昭和三年八月

發願人

- 中原 通吉
- 田上 新保
- 前田 龜吉
- 高木 龜吉
- 外一 同
- 小泉 顯應
- 甲斐 寅藏
- 山田 宗勝
- 中川 淺太郎
- 松原 巖

(主任)

社寺建築 及 臺灣檜材の安價提供

(三年以上水著乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候

追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

(充分なる水著乾燥をなしたる檜材最も優良なり水著不充分的なる檜材は干割狂ひ等の缺陷多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地

(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社 寺 工 務 所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町

社 寺 工 務 所 鶴見支所

福岡市外壱箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福岡支所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所 大阪支所

(電話西三三二四番)

- 一、耐久防腐
- 二、蟻害絶無
- 三、香氣清楚
- 四、木質堅緻
- 五、理整然木
- 六、木高稚包

昭和三年十月廿四日印刷納本

昭和三年十一月一日發行

(第四百四號)

統一表紙		
一頁	貳拾	圓
半頁	拾	圓
四分一頁	五	圓
廣告料	九	圓
印刷所	五	圓
東京府在原郡品川町南品川四百十二番地		

統一價		
一冊	金貳拾	錢
半冊	金壹圓貳拾	錢
一ヶ年	金貳圓貳拾	錢
送料共		
東京府在原郡品川町南品川四百十二番地		

不許複製

發行所

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

東京府在原郡品川町南品川四百十二番地  
 編輯人 小林順義  
 印刷人 鈴木日雄  
 印刷所 都都印刷所  
 東京府在原郡品川町南品川百八十二番地  
 電話高輪六〇二四番

電話東京五一〇七一番





次 目

教 報.....	聖訓摘要.....	日什大正師略傳.....	立正大師の功勳.....	道風徳香.....	即位禮勅語.....
	本 多 日 生	竹 内 日 照	本 多 日 生	本 多 日 生	本 多 日 生

第三十三号二十年十二月